



THE SUGGESTION

提 言

中小企業組合総合研究所機関紙

7月1日

第246号(2026年)

提言・約束事

1. 基本的には読者参加型の提言新聞とします。併せてニュース解説や話題を提供します。
2. 投稿の場合、社会規範に反するものは受け付けません。原稿掲載はスペース等の関係もあり編集者の判断にお任せ下さい。

発行所

一般社団法人 中小企業組合総合研究所

〒530-0043 大阪市北区天満1-6-8 六甲天満ビル801

電話 06-6809-6634 FAX 06-6881-0782

URL http://www.kumiaisouken.com/

生コン業界の危機と広域協組の責任を問う

関生支部抜きに生コン業界の歴史は語れない

「提言」第244号(5月1日付)の「広域協 木村理事長と地神副理事長に質す」と題した記事掲載が、関西の生コン業界のみならず、全国の生コン業界とセメントメーカー、建設業界に大きな衝撃と驚きを与えている。各業者からの質問、意見が起きているので、ここで改めて「提言」244号紙上における大阪広域生コンクリート協同組合(大阪広域協)の木村貴洋理事長と地神秀治副理事長に対する質問の本意を明確にする。

1. 生コン産業の誕生と高度経済成長

関西に生コン工場が誕生したのは、1953年(昭和28年)で、当時の大阪セメント(現・住友大阪セメント)による設立工場が第一号である。日本は折からの高度経済成長の入口にあり、下水道、高速道路、生活道路、空港、港湾、鉄鋼、電気など、全ての工場の基礎資材として大量の生コン製品が必要な時代状況下にあった。

生コン工場設立は日本の高度経済成長に一大革命をもたらしたのである。そ



関西で最初の生コン工場である大阪セメント佃工場

2. 関生支部の闘いと業界への功績

これは、①品質の安定化②大量生産が可能になった③安定供給が可能になった事であった。この事により全国各地に郵便ポストを凌ぐ程の工場が設

この1970年代、全日本建設運輸連帯労働組合関西地区生コン支部(関生支部・1965年10月設立)は大躍進の時代に入った。関生支部は人でも加入できる、企業の枠を超えた横断的・産業別の労働組合としてスタートした。特に1964年、当時のアサノセメント(現・太平洋セメント)の下請け会社である関扇運輸の社長の自殺をきっかけに、背景資本との闘いを展開するようになった。その事情背景は、劣悪な賃金、労働条件(賃金は日給制で差別的なもの)、休日は正月の3日間しかなく、

班長制度による私生活への介入、監視の強化であった。不満と怒りの解決策としては退職という手段しかなく、「腰掛け」と言われるような、人の入れ替わりが激しい職場環境であった。

しかし、この条件に我慢できずに立ち上がったのが関生支部であった。彼らは少数であった(結成時は5工場183人であった)。関生支部が結成されると、「あれはアカだ」「組合員のみならず、その子供、孫まで、まともな仕事に就けない」とする攻撃を集中的に受けた。この攻撃で組合員の脱退者があ

り、組合員に残るのは勇気のいる事であった。それでも闘ったのである。すると各会社にはヤクザを労務管理者、保安安全管理者と称して各職場に配置して、暴力的な嫌がらせをした。さらには会社主導による「第2組合」を作り、差別政策として賃上げで差別を行なった。組合幹部(の処分解雇、工場閉鎖などもあった。残業差別(第2組合優先)や、車両が新車として購入されると第2組合員を優先乗務させ配車差別を行なった。各職場に第2組合を作ったり、会社の言いなりの幹部を丸め込め、ストライキをしない事や、どうしてもするのであれば、72時間以内に会社に届ける事を協定化したり、第1組合がストライキをすると「威力業務妨害」だとして警察を職場に入れ、組合幹部を不当逮捕するなど、ありとあらゆる政策を会社は実行した。残念な事に2人の関生支部幹部が殺害され、武執行委員長は5回も殺された(2審の裁判では実行犯者と相談に加わった会社管理者が証言したが、裁判所はこれを全く無視した)。

このような攻撃にも屈することなく闘い、1973年春闘では15会社18工場による集団交渉を実現する事に成功した。1974年には、第2組合の要求「1万8800円」に對し、関生支部はそれを上回る1万9500円の回答を実現し、「労使協調路線」を打破し、第2組合主導の体制が崩壊する。1979年には、武執行委員長がヤクザに拉致監禁され、殺される寸前に助かる。この事件をきっかけに闘いが大きく前進した。1980年には、大阪兵庫生コンクリート工業組合(工組)との産業別協定書が成立するようになり、1982年まで僅か2年間で2500人の組合員を獲得、関生支部は3500人の組合に成長する。その中には新幹線の下請で働く労働者や原バス、トラック、タクシー労働者の加入があった。

これを恐れた日本経済団体連合会(日経連)の大槻文平会長は、関生支部の運動は資本主義の根幹に触れる運動だ、「箱根の山を越えさせない」と主張して、その政治力を活かし、関生支部への弾圧が徹底的に実行される。これは1982年以降10年間続いた。この時、日本共産党が「背景資本との闘いに基準を設定して、土地・株を過半もっているもの以外、背景資本とは闘わない」「権力は市民を弾圧するだけでなく、市民の権利を守る」などと関生支部への攻撃を集中する。闘っている関生支部を、権力と一体となつて攻撃したのである。

1982年12月17日、日本共産党の機関紙に突然「組合関係者との事前の協議も無く、運輸一般(今の建交労の前身)の下部組織に階級的社会的道義に反する事がある」という発表がされた。この声明が出てから、運輸一般中央執行委員会は、「弾圧反対」から「弾圧賛成」へと態度を変えた。さらには、長期勾留されていた東京地区生コン支部三役の早期保釈を求める署名活動もストップした。さらに酷い事に、中央執行委員会に検事の起訴状を配つたのである。要は完全に権力側にまわったという事である。その手法は「利権暴力集団」とか、兵庫県豊岡市竹野町にある工組所有の「竹野保養所」を「武の保養所」とでっち上げたり、ありもしない「財政に不正がある」といったものであった。関生支部の当時の公認会計事務所は日本共産党系の事務所であったが、科目の付替え等の注意はあったが、不正の事実はなかった。にもかかわらず、嘘をならべて作文した攻撃であった。

(2面に続く)

求「1万8800円」に對し、関生支部はそれを上回る1万9500円の回答を実現し、「労使協調路線」を打破し、第2組合主導の体制が崩壊する。1979年には、武執行委員長がヤクザに拉致監禁され、殺される寸前に助かる。この事件をきっかけに闘いが大きく前進した。1980年には、大阪兵庫生コンクリート工業組合(工組)との産業別協定書が成立するようになり、1982年まで僅か2年間で2500人の組合員を獲得、関生支部は3500人の組合に成長する。その中には新幹線の下請で働く労働者や原バス、トラック、タクシー労働者の加入があった。

これを恐れた日本経済団体連合会(日経連)の大槻文平会長は、関生支部の運動は資本主義の根幹に触れる運動だ、「箱根の山を越えさせない」と主張して、その政治力を活かし、関生支部への弾圧が徹底的に実行される。これは1982年以降10年間続いた。この時、日本共産党が「背景資本との闘いに基準を設定して、土地・株を過半もっているもの以外、背景資本とは闘わない」「権力は市民を弾圧するだけでなく、市民の権利を守る」などと関生支部への攻撃を集中する。闘っている関生支部を、権力と一体となつて攻撃したのである。

1982年12月17日、日本共産党の機関紙に突然「組合関係者との事前の協議も無く、運輸一般(今の建交労の前身)の下部組織に階級的社会的道義に反する事がある」という発表がされた。この声明が出てから、運輸一般中央執行委員会は、「弾圧反対」から「弾圧賛成」へと態度を変えた。さらには、長期勾留されていた東京地区生コン支部三役の早期保釈を求める署名活動もストップした。さらに酷い事に、中央執行委員会に検事の起訴状を配つたのである。要は完全に権力側にまわったという事である。その手法は「利権暴力集団」とか、兵庫県豊岡市竹野町にある工組所有の「竹野保養所」を「武の保養所」とでっち上げたり、ありもしない「財政に不正がある」といったものであった。関生支部の当時の公認会計事務所は日本共産党系の事務所であったが、科目の付替え等の注意はあったが、不正の事実はなかった。にもかかわらず、嘘をならべて作文した攻撃であった。

最近、悩みをAI(人工知能)に相談する人が増えているという。恋愛や仕事、人間関係など、家族や友人には話にくい内容を、気兼ねなく打ち明けられる事が理由だそう。AIは感情的にならず、24時間いつでも応じてくれる。確かに、孤独を抱える人にとって、AIは心強い存在なのかもしれない。

一方、AIの進化の速さには驚かされる。開発した企業自らが「危険性が高い」と判断し、一般公開を見送った例もある。自分たちが生み出した技術に、開発者自身が畏れを抱き始めているのである。

そこで思い出すのが、映画「2001年宇宙の旅」だ。宇宙船を管理する人工知能「HAL 9000」が暴走し、人間を排除しようとする物語は、公開当時は遠い未来の話だった。しかし、私たちは今、日常生活のさまざまな場面でAIの判断に頼り始めている。その姿は、60年前の映画の世界と決して無縁ではない。

ちろん、今すぐAIが意思を持って暴走するとは考えにくい。だが、もともと現実的な危険は、人間が考える事を止めてしまう事ではないだろうか。便利な道具ほど、使う側の姿勢が問われる。AIは優れた助言者にはなつても、人生の主人公にはなれない。最後に決めるのは自分自身である。その当たり前の事を忘れないためにも、私たちはAIと適度な距離を保ちながら付き合っていく必要がある。

(H)